

アラブ・日本人租界のドクター事情

岡本 文夫（元アラビア石油、元国務大臣政策担当秘書）

日本を離れること 1 万キロ。日本人オイルマンがサウディアラビア王国の原油生産現場で勤務する上で必須となる医療環境を軸としてドキュメントしてみよう。

筆者が現地駐在した通算 8 年間。約 130 人の日本人が常駐し操業に従事する中、病気で亡くなった同僚が 3 名。交通事故死が 2 名。開発権益更新の応援に来て頂いた通産省 K 部長も、交通事故で殉職された。如何に厳しい現場であったかを物語っています。

更に、湾岸戦争に先立つ湾岸危機と称する半年間は、サウディ政府の厳命により退避が許されず、「死にたくない！しかし逃げられない！」という過度の拘束性ストレスから、6 名が発癌。イラク軍の猛砲撃で殺された者は、幸いにしていなかったものの、日本での治療虚しく逝去した日本人従業員が 3 名いたことも悲しい事実です。

第六章 名医との邂逅再び

本社総務部で四年半過ごした後、二回目のカフジ勤務が回ってきた。結局、筆者のアラブ勤務は通算八年間に及ぶことになる。

再度の赴任は、子供が小学校高学年になっていたのも、寂しく不自由な単身勤務を余儀なくされた。しかし、その時期は七年半に及んだイラン・イラク紛争末期の危険極まりない局面に当たっていたし、引き続いて世界を震撼させた湾岸危機・戦争が勃発したのだから、結果的には、家族を安全圏においてきたのが大正解だった。死ぬ心配は自分のことだけ考えていれば済むからだ。

原油出荷（ SHIPPING ）統括課長としての業務責任は、前回よりも大きなものになっていたが、筆者は着任その日から職場に溶け込むことができた。

なぜならば、部下のほとんどはかつて筆者が開設した柔道場の弟子でもあったからだ。前回の勤務を通じて、筆者の人柄や実務能力だけでなく、格闘技の実力に敬意を抱いているから、アラブ人たちもその復帰を心から歓迎してくれた。

単身赴任者寮の住人となった筆者は、早速自室を仲間たちの溜まり場としての体裁を整えた。『岡本亭』と通称される部屋には、『漁労長』が稼いでくる新鮮な魚を求めて仲間たちが毎晩のように集まった。特に週末になると、ドア前の廊下に散らばった靴やサンダルの数とその盛況ぶりを物語っていた。

4年半ぶりの鉱業所には、数か月前に浅野信也という優秀な内科医が着任しており、カフジの住人に安心を与えていた。

若くして都内の公立病院の内科医長を勤めていたほどのドクターだから、普通ならばそのまま管理職として栄達を望みそうなものだ。現役の間に僻地医療を経験しようと考えるところに、世に遍く仁術を施そうとする医師としての志の高さが覗えた。

『僻地医療に貢献するなら、40歳代の今しかない』

そして、過酷なサウディアラビアの日本人租界に医療現場を求めたのだ。

小児科医を務める夫人も、夫の志を快く受け入れて2年間の留守番を了承した。浅野ドクターの素晴らしいところは、進んで国籍に関係なしに診療したことだ。

『今度来た日本人ドクターは、名医中の名医だ！』

現地人の口コミ情報が伝わった結果として、歯科以外の全ての患者が行列したのは当然の成り行きだった。

筆者自身は、本来頑健な男だから、浅野の在任中にお世話になることは一度もなかった。しかし、その名診断のお蔭でひとりの愛するパレスチナ人の部下の命を救って貰った。

忠実な部下である職長のオスマンが、ある日突然、別人と化したのに、筆者は驚愕した。

毎朝一番で、前日の原油生産量と出荷した原油と石油製品の数量と各在庫量が統計され、統括課長である筆者に報告される。筆者のサインを以ってこれが公式のものとなり、本社営業部に通知するとともにサウディアラビアとクウェイトの両石油大臣宛に提出される。

その朝、オスマンが作成したレポートの原油出荷量はあるべき数値の百倍もの数字が記載されていた。当然、在庫量とのバランスはまったくとれていない。その支離滅裂さは、この業務に二十年近く従事した担当者の仕事ではなかった。

「コラッ！ やり直した。俺に提出する前に、ダジャニのチェックも受けて来い！」

筆者は、別の職長の名前を指名して、業務の正確を期した。

そのダジャニが当惑しきって筆者の個室に入ってきた。

「ミスター・オカモト。困ったことに、最近オスマンの様子がおかしいんですよ」相談中に、本人も部屋に入ってきて、薄ら笑いを浮かべながら横に立っていた。

『それで、何か問題でもありますか？』

その日以降のレポート作成はダジャニに代役を命じて、筆者はオスマンをじっくり面接した。

「お前、自分が何かおかしいと思わないか？」

「いいえ、ミスター・オカモト。何でそんなこと質問するのですか？」

筆者は、オスマンが何らかの原因で重症の『まだらボケ』を発症したと観察した。自分でも、深刻な異変を自覚しているに違いない。しかし、それを認めると、サウディでは外国人でしかない流浪の民のパレスチナ人だから、クビになるだけでなく就労ビザにリンクした居住ビザも喪失する。祖国を失った彼らには帰るべき場所もないのだ。意識の中の正常な部分ではその恐怖を判断できるから、必死でお愛想笑いを浮かべながら正常であることを演技しているに違いない。

直ちにオスマンを連れて、浅野ドクターの診療室へ向った筆者は、ドクターの優秀さに驚いた。状況説明を聴いた後、浅野は的確な指示を与えた。

「岡本さん。この患者を立たせて、両腕を伸ばしたまま肩の高さまで上げて静止させて下さい。そうしたままで、目を閉じさせて下さい」

オスマンは相変わらず微笑みを浮かべたまま命令に従った。ところが、瞼を閉じた途端に、伸ばした右手だけが三十センチほど下がった。

「ははあ、解りました。彼の左の脳に何か深刻な異常がありますね。岡本さんの説明から判断して、非常に急性のものと診察されます。この病院には脳外科がないので何もできませんが、レントゲン写真は撮れますから直ぐに原因だけでも究明しましょう」

出来上がったレントゲン写真を見て、筆者は思わず唖った。素人が見ても明らかな大きな脳腫瘍が三個も見てとれたのだ。一生懸命に異常を隠しているオスマンにもこの重度の病状が理解でき、パニックに陥った。急激に増大した腫瘍が脳室を圧迫して、論理思考を司る機能が働かなくなったに違いない。

アザー・アラブと総称されるパレスチナ人は、役に立たなくなったらお払い箱だ。然るべき病院で手術させようにも、中級職止まりのパレスチナ人の給与は筆者が承知している通りだ。とても海外での治療に要する経済力はない。

放っておいたら死ぬに違いない。何とかしてやりたいとデスクで悩む筆者に、オスマンが事故を起こしたと急報が入ったのは二日後だった。

日報作成はダジャニに代役させたものの、少しは仕事させるために鉱業所本館にある両政府担当窓口への提出は任せたままであった。

その朝、異常を抱えたままのオスマンが階段から転落したという。救助に駆け付けてみると、固い大理石製の階段の下で、肘や顔面の打撲箇所から血を流してオスマンが呻いていた。災い転じて福となせ！ 筆者には天啓が閃いた。

『公傷にしていまえばいいんだ』

同行したムスタファに、怪我人を浅野ドクターのところへ送り届けるよう指示

するとともに、筆者は別の行動に移った。

シャーリア法という固有のイスラーム法が律するサウディアラビアでは、犯罪にせよ事故にせよ、必ず3人の目撃者の立証を必要としている。

状況としては、日報を届けるための業務上の事故と解釈しようとするれば、こじつけられないことはない。公傷扱いを会社に認めさせるために必要なのは、3人の証人である。飛んできた筆者とムスタファは、転落を見ていたことにすれば良い。もうひとりの証人を作るために、筆者は本館階段脇にデスクを持つ企画部の佐藤を巻き込んだ。血相を変えて、突然入室した筆者に、佐藤は驚いた。

「ちょっと頼みがある。外へ出てくれ」

「先輩、いったい何ですか、急に」

「いいか、お前は見ていたことにしてくれ。あの階段から俺の部下が転落した。彼の命に関わることなんだ。公傷扱いにするためには、もうひとり証人が必要なんだ。頼む」

「他ならぬ岡本さんのおっしゃることですから断れませんが、大丈夫なんですよ。私に偽証の迷惑が掛かっては困りますよ」

「大丈夫だ。俺が責任を持つ。お前は、俺が作成する申請書に目撃者のサインをするだけでいいんだ」

筆者の公傷治療申請書作成と並行して、浅野ドクターはロンドンの然るべき脳外科総合病院への引継ぎ書類を準備してくれた。

死亡を伴う大事故も度々発生する原油生産現場では、公傷へのケアには非常に篤いレギュレーションがあるから、筆者は愛する部下をそのスキームに乗せたのだ。そうすれば、手術費用も飛行機代も会社負担に転化できる。

脳外科手術を受けて頭にグルグル巻きの包帯をしたオスマンが戻ってきたのは、3週間の後だった。手術が成功して、オスマンは完全にもとに戻っていた。

「ミスター・オカモト！」

大男のオスマンに抱きしめられ、男同士のキスをされるのは愉快ではなかったが、この場合は相手の好きなままにさせてやるしかない。

オスマンは男泣きしていた。

「あなたは、私の命を救って下さいました」

「いやいや、お礼は浅野ドクターに言いなさい。内科医なのにあそこまでの確な診断を下すのは、彼にしかできないことだ」

一方、浅野ドクターは性格そのままの謙虚さを崩さなかった。

「岡本さんが、あそこまで正確に本人の病状を把握しておられたからこそできた診断でしたよ」



おかもと・ふみお

1947 年生まれ。アラビア石油勤務を経て、元国務大臣・村田古隆衆院議員の政策担当秘書を務めた。2013 年「小説湾岸戦争 男達の叙事詩」（財界研究所刊）を伊吹正彦のペンネームで出版。講道館柔道五段（クウェート国柔道連盟七段）。

To be continued